

発表タイトル 江戸歌舞伎における音曲正本の版行上の特徴について
—音曲正本・せりふ正本の書誌調査をもとにして—

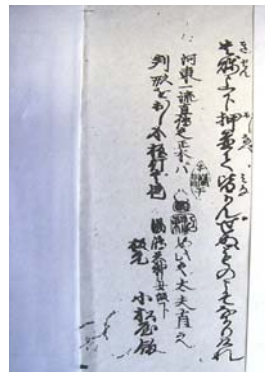
発表者所属名 国際日本研究専攻 国際日本文化研究センター

発表者氏名 漆崎 まり

発表内容



長唄正本『江戸桜五人男掛合文七節』の表紙と奥書
(享保19年3月上演、早稲田大学演劇博物館蔵)



河東節正本『突出の紋日帯曳男結』の奥書
(享保8年正月上演、東京芸術大学蔵)

江戸の歌舞伎では、花形役者による舞踊の場面に河東節や長唄、常磐津・富本・清元節など、多彩な音曲がつかわれ、華やかな見せ場となっていた。それらの音曲の歌詞は3～5丁ほどの小冊子となり、薄物正本とよばれて、せりふ正本とともに芝居茶屋や絵草紙屋から配られた。

これらの音曲正本は、享保頃から明治期まで刊行されており、伝本も多く、江戸歌舞伎において音曲がどのように展開していったのか知るための重要な手がかりとなる。本発表では、正本の版行形態を通じた、長唄と浄瑠璃の違いについて述べてみたい。

〈長唄正本とは〉

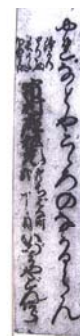
長唄正本は、座に所属する囃子方が演奏した音曲の歌詞を載せたもの。
唄方ではなく、座元と提携する版元から刊行される点に特徴がある。

〈浄瑠璃正本とは〉

浄瑠璃太夫は歌舞伎の座に所属しない。
歌舞伎に用いられる代表的な浄瑠璃には、江戸浄瑠璃では河東節、豊後系浄瑠璃の常磐津・富本・清元節がある。
浄瑠璃正本は太夫と提携する版元から出る。

【視点】

- ・ 奥書にみる作者校訂譜のあり方
- ・ 版行の権利（芝居番付との共通性）
- ・ 稽古本の需要による再版の出方
- ・ 座元系版元と浄瑠璃既存版元の競合
- ・ 天明期以降における長唄正本の株板化



長唄正本『めりやす 花の香』奥書
(宝暦7年2月上演、早稲田大学演劇博物館蔵)



長唄正本『五月菊名大津絵』刊記
(寛政3年5月上演、早稲田大学演劇博物館蔵)